九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

# 『在明の別』巻三本文校訂・読解ノート

辛島, 正雄
九州大学大学院人文科学研究院文学部門 : 教授

https://doi.org/10.15017/2230550

出版情報：文學研究. 116, pp.19-64, 2019-03-18. 九州大学大学院人文科学研究院
バージョン：
権利関係：

# 『在明の別』巻三本文校訂・読解ノート

辛島正雄

『無名草子』に名前が見え、平安最末期の成立かと目される『在明の別』は、全三巻からなる長編（中編？）物語である。先行する新旧『とりかへばや』で活躍する女中納言の後継ともいうべき「男装の麗人」＝右大将の存在感が圧倒的なこの物語は、かれを軸に展開する巻一が、分量も多く（墨付は、巻一97丁、巻二71丁、巻三49丁と漸減する）、内容的にも断然目を惹くものであるため、そんなかれが、帝と春宮の母＝女院として、夫である院との琴瑟相和する生活に入り、物語の主役の座を故右大将の子＝左大臣に譲ったあとの巻二、巻三については、必然、研究者から向けられる関心も、きわめて低調なものにならざるを得なかった。と同時に、物語を表現に即して丁寧に読み解こうとする努力も、巻の進行とともに、先細りの感が否めないのである。

こんにち、『在明の別』を研究対象に据えて読もうとするとき、すでに二種類の翻字テキストと写真複製とが備わってはいるものの、研究者にとっても、なにより読解の支えとなる注釈書としては、出版後四十年、あるいは五十年近くが経過した、大槻修氏による二次にわたる研究成果に頼るほかない状況がつづいている。そこでは、初めて試みられた無名の作品に対する全注釈としては、破格ともいうべき周到さ、緻密さでもって、慎重に校訂本文が定められ、読解に資する詳しい頭注や補注、さらには対訳までが提供されている。よって、それらに導かれつつ読

みすすめればよいはずなのだが、じっさいに読み始めてみると、どうしても気になるのが、なお十分に理解できたとはいえない、あるいは解釈に異を唱えたくなるような箇所が、続出することなのである。それゆえ、ユニークな作品世界に身をゆだね、その表現を存分に楽しむという境地にまでは、なかなか行き着けない――というのが、偽らざる実感である。

ならば、ということで期待されるのが、物語読解のための知恵を持ち寄り、検討しあう環境を整えることであろうが、そのような問題意識をもつ研究者が少ないせいか、今のところ、全巻にわたるまとまった成果としては、妹尾好信「『在明の別』本文校訂覚書」（同氏著『中世王朝物語　表現の探究』〔二〇一一年、笠間書院〕所収）が、ほぼ唯一のものである。妹尾氏は、巻一から二十四箇所、巻二から十三箇所、巻三から九箇所を取り上げ、新たな本文校訂案を提示していて、いちいち首肯される点が多いのだが、それでも、「なお、この他にも、明らかに誤写や脱落、あるいは何らかの錯誤がありそうだとは思うものの、今のところ解答の案さえ考えつかないところがいくつもある。」（三七三頁）と述べている。

そこで、本稿では、物語世界を終わらせることへの意識が強すぎるせいか、露骨な人員整理をも辞さない強引な展開が随所に見受けられるなどして、巻二に較べても、丁寧に検討される機会に乏しかったと思われる巻三に集中するかたちで、本文校訂と読解とをめぐる問題点を順次（網羅的に、でないのは、ひとえに筆者の力不足による）指摘し、それぞれについて解決の道を探ることにする。あわせて、こうした地味な作業の蓄積が、今後、『在明の別』全体の読解を深化させ、作品の共通理解の底上げにも繋がるよう、期待したい。

以下、『在明の別』の本文の引用は市古貞次・三角洋一編『鎌倉時代物語集成 第一巻』（一九八八年、笠間書院。略称『集成』）によったが、『天理図書館善本叢書6 あさぢが露・在明の別』（一九七二年、八木書店）の写真複製により翻字を確認し、引用にさいして、誤植等は正し、適宜不足する活用語尾等を括弧内に補い、句読点・鉤括弧・傍注等に

ついても、私見により改めることがある。また、必要に応じて、中村忠行・曾沢太吉校『有明の別 上・下』（一九五七～一九五八年、古典文庫。略称『古典文庫』）も参照した。注釈書としては、大槻氏の『在明の別の研究』（一九六九年、桜楓社。略称『研究』）と『有明けの別れ―ある男装の姫君の物語―』（一九七九年、創英社。略称『全対訳』）の二冊を机辺に置き、正しい読解のために、徹底的に吟味することに努めた。物語の展開の確認には、『全対訳』に示された段落分けとその見出しを借りた。そのほかの本文の引用は、散文は『新編日本古典文学全集』（小学館）に、和歌は『新編国歌大観』（角川書店）によったが、表記等に多少手を加えたところがある。用例検索には、JapanKnowledge Lib や CD-ROM 版を随時利用した。

まずは、巻三の冒頭である。

1 ふちとなりてもよどむとかと、むかしかくみなくて[し]、「いまはかぎり」と思ひとぢめしわかれのみちのかなしさを、ふたゝびかはらぬさまにてみたてまつり給（ふ）御よろこび、さしあたりては、なにごとかたぐひあらん。

（四一七頁／19オ）

直前の巻二巻末では、左大臣の子を身籠った右大臣の大君に物の気が取り憑き、絶命寸前に陥れる。女院の命を受け、慌てて参上した山の座主[1]の験力によって、物の気は駆り移され、寄りまし童の口を借りて恨み言を喚き散らすのを、右大臣のみが妹である中務宮の北の方の生霊だと悟る、というところで閉じられていた。それが、一転、大君の生還を喜ぶ場面から再開する。

傍線部は、つとに指摘のあるとおり、引き歌（『古今和歌集』哀傷・八三六番・壬生忠岑）による起筆である。巻一、巻二も、ここと同様の起筆であったが、『全対訳』がいみじくも、「「瀬をせけば淵となりても淀みけり――」とか、昔は、人の死をかく見なして嘆いたが」（三八一頁）と訳したように、「ふちとなりてもよどむとかと」の最後の「と」

の文字が煩わしい。衍字と見て、削ったほうがよいのではあるまいか。

文意は、引き歌の下の句にいうように、「別れをとむるしがらみぞなき」と、昔から死別は人の力ではいかんともしがたいとされてきたのに、死別を覚悟していた大君が、以前と変わらぬ様子で蘇生したことを、みなが歓喜した、というのである。

これにつづく、四条の上危篤の報がもたらされるくだりを検討する。

**2** ざすも「なをいましばし」とゝめきこえ給（ひ）て、みずほうなどあまたそえさせ給（ふ）。くれつかたしばしうちやすみ給えるに、又、「四条のこゑかぎりのさまにをはす」とて、御つかひさはぎまいりたるをうちきゝ給、ものおぼえ給はず。かついふかひなくみえ給（ふ）をもいだきもちて、へだてなくみ給（ひ）しは、なをなぐさめ所あるにや、「こはいかにしつることぞ」と、あしもそらにまどひをはしたれば、うちのをとゞぞつといだき給える。（四一七頁／19ウ～1オ）

傍線部Aは、従来、山の座主に、「なをいましばし」と依頼して、「ゝめきこえ」たと解されてきたところであるが、むしろ、すべて地の文として、「座主も、（物の気を退散させた今も）なほ、いましばし留めきこえ給ひて」と読むほうが自然ではあるまいか。「止め」ではなく「留め」であろう。意味的には区別がむずかしい「止む」と「留む」ではあるが、念のため、謙譲の「きこゆ」が下接する例を『新編全集』内で検索すると、驚いたことに、「留めきこゆ」のかたちでは多数出てくるのに、「止めきこゆ」は皆無なのであった。

傍線部Bは、『研究』では、「うち聞き給ふ、もの覚え給はず。」（二六三頁）と校訂し、『全対訳』も、「うちぎきたまふ、ものおぼえたまはず。」（三八二頁）とする。「うちきゝ給ひ、」と読むことも可能であろうが、いずれにせよ、直後の「ものおぼえ給はず。」との繋がりがしっくりしない。思うに、ここは、「も」の次にあった「ゝ」が落ちた

のであって、もとは「うちき、給も、のおぼえ給はず。」だったのではあるまいか。よって、「うち聞き給ふも、ものおぼえ給はず。」と解することにしたい。

傍線部C以下について、『全対訳』では、次のように現代語訳している。

いまは回復の見込みなく見えなさる状態でも、抱きかかえて、隔てなく看病しなさったこと、かつは慰め所があろうというものか。「でも、これは一体どうしたことか」と、（下略）（三八三頁）

「かつ」の訳出に苦心のあとがしのばれるが、もとは「かく」とあったのではないか。直前まで、こうして重体の右大臣の大君につきっきりで、ようやく快方に向かうのを見届け、安堵したのも束の間、今度は四条の上危篤の報せを聞いて、慌ててそちらに向かった、というのである。なお、左大臣が向かった先を、『全対訳』では「内大臣邸」（三八三頁）とするが、失考であろう。内大臣が三条の女母子と再会したのち、二人を迎え取ったとの記事はなく、ここでも娘は「四条の上」と呼ばれているほか、後文でも、内大臣が中宮の姿を垣間見したときに、「いかにぞや四条の君の御をもかげ、ふと思ひいでらるゝに、」（四一九頁／4ウ）とある。さらには、死ぬ間際の生活ぶりも、「をとこずみにてとしごろになり給へれば、よろづいとすさまじ。」（四二六頁／15ウ）とあるので、母子の住まいは、依然として四条にある左大臣の播磨の乳母の家のはずである。

左大臣が四条の上のもとに駆けつけると、すでに実父である内大臣が来て、娘の介抱に当たっていた。四条の上は、容貌や雰囲気までが一変して、取り憑いた物の気が中務宮の北の方の生霊であると察した内大臣は、自分への恨みが原因でここを尋ね当てたのだろうと思うと、過去の軽率な振る舞いが後悔されるいっぽう、物の気調伏に力を入れる。

**3**「あまりこちたくまつはれ給（ひ）し（中務宮の北の方の）心ぐせ、ついにしつること」、み給（ふ）ま、に、わ

がみのつみをもき心ちして、あやまたぬそうどもをもみせため給（ふ）。（四一七頁／1ウ）

傍線部について、『研究』では、「「みせ」ため給」を「さ」の誤写と見て改める。」（三二〇頁）として、「過たぬ僧どもをも見定め給ふ。」（二六四頁）と校訂、『全対訳』では、「物の怪調伏に間違いのない僧どもを見定めなさる。」（三八五頁）と現代語訳する。ところが、『集成』には、誤写が疑われるさいに付される傍注が見えない。ということは、このままの本文で問題ない、と判断したものであろう。筆者もまた、改訂は不要と考える。なぜなら、ここは、「過たぬ僧どもを、揉み責め給ふ。」と読みさえすれば、なんら本文上の問題はないからである。

「もみせたむ」の語は、『日本国語大辞典第二版』（二〇〇一年、小学館。略称『日国大』）に立項されており、『狭衣物語』巻一の用例（①一〇三頁）を掲げ、「もみくちゃにする」意と説明するが、ここでは、「もみ、せため」と、各語のニュアンスを生かした理解のほうがよいと思われる。「もむ」の語義について、『日国大』では、「②（「数珠（ずず）をもむ」意から）仏に強く訴える。転じて、何かを強要したり、激しく責めたてたりする。」と説明する用法があり、ここはまさしくこれに該当する。「せたむ」も、『日国大』に、「あやまちをとがめる。強く責（せ）める。責めさいなむ。」とあるごとくで、内大臣が、僧たちを激しく責め立てて、物の気調伏に当たらせた、との意である。「過たぬ僧ども」とあるのは、僧たちに落度はないのに、自分のほうに「わが身の罪重き心地」がする負い目や焦りがあるせいで、無理難題を押しつける依頼者＝内大臣を、軽く皮肉る筆づかいである。

すこし飛んで、中宮が帝の皇子を出産したあとの、「八　盛大な御産養の儀」の場面を取り上げてみよう。

**4** 七日のほどは、女院もかくてをはしますべければ、いとゞしき宮のうちなり。あまうゑはよろづをしとられたてまつりて、わが御みゆかしうおぼさるれば、ひるはさしいで給はず。よる〳〵など、いとはつかにぞほのめきいで給（ふ）。（四二一～四二二頁／7ウ～8オ）

傍線部の本文に不審があるのだが、ここについては、前掲妹尾論文がすでに検討を加えており、次のように説く。

問題は「よろづをしとられたてまつりて」の部分である。大槻氏はここに「中宮から、むりやり部屋を全部とられなさって」と注しておられるのだが、いくら盛大な産養いのためとは言え、広い太政大臣邸で、娘の中宮が出家した母の部屋を全部取り上げてしまって母は居場所がなくなったというのはいかがなものだろうか。（中略）「をしとられ」の本文に従う限りは無理に奪われる意に取らざるを得ない。おそらくここには誤写があるのであろう。思うに、もともとは「おしけたれたてまつりて」とあったのではないであろうか。「けた（介多）」が「とら（止良）」に誤写されたと考えるわけである。出家して静かに暮らしていた尼上は、中宮の出産祝いでごったがえす邸内の賑やかさにあらゆる点で圧倒されてしまったというのである。『源氏物語』澪標の巻に、「春宮の御母女御のみぞ、とり立てて時めきたまふこともなく、尚侍の君の御おぼえにおし消たれたまへりしを」云々とある類である。（三六八頁）

大槻氏の解釈に問題があることは疑いない。ならば、妹尾氏の誤写説で解決するかといえば、これも微妙である。「おし消たれ」と表現するには、「澪標」巻の例からもわかるように、「おし消たれ」る側と「おし消つ」側とが、対等に張り合う関係になければならない。その点、対の尼と娘の中宮とは、はなからそのような比較の対象ではあり得ない。さらに、「おし消たれたてまつりて」という待遇表現のありかたも、不審である。下に謙譲の補助動詞がくる場合は、『源氏物語』「紅葉賀」巻に見える、「この中将は、さらにおし消たれきこえじと、はかなきことにつけても、思ひいどみきこえたまふ。」（①三四六頁）のごとくに表現するものであろう。よって、「静かに暮らしていた尼上は、中宮の出産祝いでごったがえす邸内の賑やかさにあらゆる点で圧倒されてしまった」という理解にも、素直に従えないのである。

そこで、代案を提示するとすれば、「をしとられ」を「をしとめ」の誤写と見てはどうだろうか。「おしとどむ」

は、「さえぎってとどまらせる。行動を制止してやめさせる。」（『日国大』）意であるから、ここは、慶びに沸き立つ邸内で、中宮の母である対の尼にも、孫の誕生ということで、ぜひ祝賀の輪に加わるようにと誘ってくるのを、出家の身で遠慮されるからと、「よろづ押しとどめたてまつりて」＝すべての誘いを遮り、自分の参加を止めさせ申し上げて、昼間は人中に顔出しすることもせず、人目のない夜間にだけ、遠慮がちに中宮母子の前に現れた、というのである。なお、『集成』において「ひるはさしいで給はず。」となっている句点は、『研究』『全対訳』のように、読点とすべきであろう。

ついで、「九　初夏の太政大臣邸のすばらしさ」の段における、女房の装束についての描写を取り上げる。

5中納言の君、かきつばたにはなたちばなのうはぎ、「ちよをならせる」などやうに、めづらしげなきふる事なれど、をきなしたるきのさま、いはのかども、なべての人のよりも、よういありとみえたり。（四二二頁／9オ～9ウ）

女院づきの中納言の君の着る表着に施された装飾について、傍線部を『全対訳』では、「蒔絵に箔で模様をつけた樹の風情、岩の角も」（四〇一頁）と訳すのだが、「岩の角」というのがよくわからない。「木のさま」と「岩のかど」とが対になっていることからすると、「かど」は「さま」と対応する語である必要があろう。そこで、『日国大』の「かど【才】」の項を見ると、「②おもむき。持ち味。」の意として、『栄花物語』巻二十三「駒競べの行幸」の、「あやしき草木を掘り植ゑ、かどある巌石を立て並べて」（②四二四頁）を用例に掲げている。では、ここも、岩の趣き、と解せば、疑問氷解だ、と一瞬喜んだのも束の間、よく読むと、『栄花物語』の本文は、文字どおり、角ばった奇岩の意と解すべき（『新編全集』頭注）ものであり、そもそも用例として掲出するのに不適切だったのである。さらに、『うつほ物語』「祭の使」巻に、「御前の前に、なだらかなる石、角ある岩など拾ひ立てたる中より、川の湧きたる、滝落ちたるなど見たまふとて、」（①四七二頁）とある例などからしても、「岩の角」との理解で問題なかったといえ

そうだ。「岩の……」との表現を探すと、「岩のたたずまひ」の例が、『狭衣物語』巻四（②二七一頁）、『御津の浜松』巻一（三九頁）、『今とりかへばや』巻一（二三二頁）に見出される。すると、「岩の角」とは、岩の様子のなかでも、とくに険しく尖った形状をいうのであろう。奇岩景勝に、松の木などを取り合わせた意匠でもあったか。

その後、日数が経過して、「一二　盛大に若宮の御五十日の儀」の段における女院の描かれかたについて、検討してみたい。

**6** 六月はわか宮の御いか、世のいそぎなり。そのひは宮（＝中宮）もいらせ給（ふ）。女院もかねてよりうちにをはします。やがて御子をばぐしきこえさせ給（ひ）て、院へまかでさせ給（ふ）べくおぼしめしをきてさせ給（ふ）べし。れいのそのひのさほう、いかでかみとゞめむ。A「かや・のほどのうたのぞるにや（ましう）」といふにも、さりげなくかくれまはします（おお）御心のみこそ、もどかしき所もうちまじらせ給はめ。げになに事につけても、また（女院に）ゝぐひきこえさせたる人のありがたきこそくちをしけれ。（四二四頁／12オ～12ウ）

なにより、傍線部Bが、このままでは読み解きがたいものである。『集成』の傍記は『研究』の校訂案（三二一頁）に従うものであるが、かなり大胆に脱字と誤写とを想定しており、はたしてこれでよいものか、にわかに判断がつかない。それでも、「望ましや」（二七七頁）との校訂本文を立てることについてだけは、はっきり反対を表明しておこう。なぜなら、『日国大』の「のぞましい」の項に挙がる古い用例が、いきなり『天草本伊曾保』と『日葡辞書』という新しさだからである。『新編全集』を検索しても、かろうじて馬琴の読本中に数例が拾えるのみ。そのような語を、この物語の用語として認めるわけにはゆかない[3]のだ。となれば、ここは、読解の原点に立ち返り、いらぬ先入観を排して、まずは前後の文脈をよく観察したうえで、そこに適合するような本文を模索するほかないであろう。

問題の傍線部Bのあとは、女院が「さりげなく隠れおはします」云々とつづくのだが、このあたりを『全対訳』

では、次のように現代語訳している。

かやう（ママ）な折、若宮五十日の賀の歌が望ましく、女院に求められたが、女院ご自身は、さりげなくご遠慮の風でいらっしゃるそのお心ばかりは、何としてももどかしい一点はうち交じりなさるものの、まことに、何事につけても、この女院に類うような方が、めったに居られない、ということも、考えてみれば口惜しいことで――。（四〇七頁）

大槻氏は、『研究』でも、「若宮五十日の賀の歌を、女院に所望。」（二七七頁）と注している。賀宴において祝いの歌が披露されることじたい、なんら不自然な点はないのだが、この物語の、この場で披露されたのは、ほんとうに歌だったのであろうか。これが歌を披露する場であるなら、女院が「さりげなく隠れ」ている必要などあるまい。むしろ、積極的に参加が期待されるところであり、女院の性格からすると、「さりげなくご遠慮」どころか、喜色満面に自分からすすんで詠みさえしそうである。だとすれば、ここで披露されたのは、和歌（やまとうた）ではなく「漢詩（からうた）」だった、ということになるのではないか。作文の場に女の臨席は憚られるので、当然ながら女院も、「さりげなく隠れ」ているほかない。しかし、披講する声はおのずと聞こえてくるので、詩のできばえについて、その場にいる男たちがどう思っているかはともかく、隠れて聴く女院ひとりだけは、「もどかしき所も」一部に感じたようだが、批判は心内にとどめておいた――というような事情が想像される。そうだとすれば、ここからは、『大鏡』地の巻に、「人々文作りて講じなどするに、よしあし、いと高やかに定めたまふ折もありけり。」（二五八頁）と語られる、藤原道隆の三女の逸話が想起されるが、それは、あたかもこの場面の陰画を見るかのようである。

男装解除後も、女院が漢詩を作ることに対して、特別な感情を抱きつづけていること、また、かつての右大将のごとく漢詩に堪能な男が不在であることについても、物語には何度も言及がある。例えば、巻一、「六八　男装の頃を懐かしく回想」の段には、懐妊のため里下がりしている女御（＝女院）のもとに、人々が作った漢詩を、帝がこっ

そり送り届けてくる。すると、それを見た女御の反応が、「をなじだいの心もをよばぬ所おほかるを、（女の姿となった今は遠慮して）人にこその給（は）ねど、（拙い漢詩ばかりであることを）くちをしくうち思（ひ）まはさるゝ」（三五七頁／80オ）と描かれているので、ここもまた、そのときと同様の感想を抱いたのであろうと推測される。

引用文の直後には、左大臣が女院の教えを受けて、「なべての人にことなる御ざへのきは」（四二四頁／12ウ）ではあるものの、いまだ女院の期待する水準には達していない、そのいっぽうで、幼少期から日夜女院の薫陶を受けている春宮については、「なにごとにつけても、たゞひかりかくれ給（ひ）しこ大将（の）御かはりには、この宮（＝春宮）のみぞすゑのよてらさせ給（ふ）べき。」（四二四～四二五頁／12ウ～13オ）と、対比的に言及があることからも、このあたりは、漢才（からざえ）についての記述として、ひとつづきのものと思われるのである。

それにしても、「かやのほとのうたのそるにやといふにも」との文字列は、どのように読み解いたものか、右のように考えてきても、残念ながら解決策が思い浮かばない。後考に俟つ。

あわせて、傍線部Aについてであるが、『日国大』の「みとどむ」の項に、「目をとめる。また、確かに見る。」の意を表すとして、この箇所が用例に掲げられており、『全対訳』では、「例によって、御五十日の儀の作法など、この拙い私がどうして見とどめ得ようや。」（四〇七頁）と訳している。しかし、ここでの「作法」が「作文」であるとすれば、女である語り手には、もとより「見とどめ」る機会は存在しない。女院が「隠れ」て聞いたのと、同じ状況である。だとすれば、ここは、もと「いかでかみゝとゞめむ。」とあったのを、「ゝ」の文字を脱落させたのではあるまいか。女の私には、聞いて理解できるはずもない、というのである。

こうした儀式に臨んでの草子地は、物語全体に少なからず見え、巻三、「八　盛大な御産養の儀」の段では、「いつかしきことをつくされたる、さらにかきとゞめむかたなし。」（四二二頁／8オ）との省筆の直後に、「あながちに物おぼえぬ女なれば、みだにわかず。」（同）といった語り手の立場を記しているほか、院の四十の賀を描く「二四　故

大将に似た東宮の容姿」の段にも、「こもの、なにがしとさゝげあつめたるなどは、れいのはかなき女のかきつゞくべきにもあらず。」（四三二頁／26オ）とある。

ついで、「一三　親王の宣旨、御封、冠あり」の段を取り上げる。

7 大との、大宮もこの（若宮への親王宣下の）御よろこびのついでにぞ、いまひときはの御くらゐあがり、ねんくわん、ねんしやくなど、ことぐしくぞそはせ給（ふ）ことゞも、さまぐをもだゝしきを、人しれぬ（内大臣の）御心に、（本当は自分の娘の慶事であるのに）よそのめでたさにのみきゝふし給へるは、あきかぜをまちいづるにつけて、御なみだぞこぼれそふくき。（四二五頁／13オ～13ウ）

傍線部は、『集成』のみならず、『研究』（二七八頁）『全対訳』（四〇八頁）いずれも同様であるが、「ことごとしくぞ」とあるので、「添はせ給ふ。」でいったん句点としたいところである。直後の「事ども、さまざま面立たしきを」に、若干落ち着かない感じは残るが、「事ども」の上に修飾語が必須ということもあるまい。例えば、『夜の寝覚』巻三には、「内の大殿（おほいどの）は、ふすべ果てたまはず、事ども（＝督の君の入内の準備を）御覧ずるに、いささか、そのことこそ飽かず足らはざりけれと見ゆることなく」（二三七頁）とある。なお、従来から「ことゝも」と翻字されてきたこの箇所は、写真複製を素直に読めば「ことくも」なので、『集成』の翻字方針に従えば、「ことくも（ゝ）」もしくは「ことくも（と）」とすべきところである。

つづく、「一四　内大臣、衰弱の一途」の段は、次のように始まる。

8 このとしごろとなりはてば、たゞひとりのみおち（は）するつもりにや、いまははかぐしうをきゐ給（ふ）こともかたければ、たれもくおぼしさわぐに、れいのいみじき御物（の）けをもくて、ともすればとりいれたてまつる。

（四二五頁／13ウ）

傍線部について、『全対訳』では、「独身生活も、もうこのお齢（とし）まで続いてしまうと」（四〇九頁）と訳すが、「なりはてば」は「未然形＋ば」なので、そのようには解せない。『古典文庫』では、「なり、はては、」（一二二頁）とするが、これも、「はては」が、挿入句「ただ独りのみおはする積もりにや」の下の「いまは」と干渉しあって、やはり文章として落ち着かない。そこで、「はては」のはじめの「は」を衍字と見て、「この年ごろとなりては」と読んでみてはどうであろうか。あるいは、「なりはて」のあとに「ゝ」が落ちていると見て、「なりはてては」と読むことも考えられるが、「（…の状態に）なりはつ」の語を用いる必然性に乏しい。ひとまず、衍字説を提唱しておきたい。

内大臣は、わが娘だとわかった中宮と、親子の名のりを上げることのかなわぬ嘆きから、衰弱の一途をたどり、思い余って、中宮づきの侍従の内侍に手紙を書く。

**9** 中宮のじゞうのないし、たづねて御文かき給（ふ）。「うちやすみつゝ、いとくるしけれど、いまはかぎりになりにて侍るさまは、をのづからきき給（ふ）こともあるらんを、心うくもの給はぬかな。いまはかぎりと思ひなれても、おほくの月日をすぎぬれど、よろづの事、「又はいつかは」と思（ひ）ならるゝとぢめにしも、うらみのこる事なんおほかるわざなりける。いとびんなくおぼさるゝめど（ら）、いまはよになからんにもおぼしゆるして、たちよらせ給（ひ）なんや。よとゝもにはるけやらぬゆめがたりも、人づてならで、とひあはせきこゆべき。

かきくれし心のやみをそれながらくもゐの月のかげをみぬかな

さるはまたたれにかうれへきこえさせん」とあるを、（侍従の内侍は）めづらしうひきあくるより、人にこそいはね、よとゝもにをそろしう思ひわたるすぢなれば、まづかなしうて、ほろ〳〵とぞなかれぬる。「げにいまはかぎりにもをはすらん。うらみのこり給はんもあぢきなし」と思へば、御かえりきこゆ。たゞそこはかとなく、

「てる月のくもゐのかげはわかねどもまがふやみぢをきくぞかなしき
くれになん、みづからきこえ侍るべき」とあるを、（内大臣は）いとうれしうおぼして、くるしき御心にもまちくらし給（ふ）。（四二五～四二六頁／14ウ～15ウ）

傍線部Aは、従来、内大臣の手紙の冒頭と解されているが、むしろ地の文として、内大臣が苦しいながらも、書いては休み、書いては休みして、なんとか書き上げた手紙が以下のもの、というのではないか。「今は限りになりにて侍るさまは」と書く前に、「こうして病いの床に臥しながら、まことに苦しみに耐え得ぬが、」（『全対訳』四一一頁）などと、わざわざ今の自分の体調を説明する必要が、どこにあろうか。加えて、内大臣の手紙の書き出しは、次のような、『源氏物語』「柏木」巻に見える、女三の宮にあてた柏木の手紙の書き出しを、そっくりそのまま写し取ったようなものであった。

「今は限りになりにてはべるありさまは、おのづから聞こしめすやうもはべらんを、いかがなりぬるとだに御耳とどめさせたまはぬも、ことわりなれど、いとうくもはべるかな」など聞こゆるに、（下略）（④二九一頁）

さらには、地の文と認定した傍線部Aと同様の表現も、同じ巻の後文に、「（女三の宮への）御返り、（柏木は）臥しながらうち休みつつ書いたまふ。」（④二九六頁）と見えているのだ。これらを踏まえて、内大臣の手紙の始まりは、「いまはかぎりになりにて」からと認定したい。

ところで、手紙の「心うくもの給はぬかな。」以下の解釈に、不審な点が続出するので、詳しく検討してみたい。まずは、『全対訳』の現代語訳を確認しよう。

中宮が実は私の子であることを、ご存知であろうものを、なぜ真相をお知らせくださらないのですか。私は、今は限りと、何度も危篤に陥ることを経験してきたが、多くの月日を過ごしたものの、よろずのことに恨みを残し、また何日の日か、その恨みを晴らそうと思うようになったそのとどのつまり、やはり多くの恨みばかり

が残ってしまったことです。中宮が実は私の子である――など、あなたは大層不都合なことを、とお思いでしょうが、いまや自分は重体の身、この世にあるかなきかの状態であるという点でお目こぼしくださって、ぜひ拙宅へお立ち寄りくださらぬか。（四一一頁）

一読、唖然――落ち散る危険を考慮して、わかる人にしかわからないように書くのが作法であろうに、（読者に、内容理解への便宜を図った訳文となっているにしても）かくも露骨な文面の手紙など、あり得ない、との印象である。ならば、どのように理解すればよいか。

手紙の書き出しの文章最後の「心憂くものたまはぬかな。」は、柏木の手紙に「いとうくもはべるかな」とあるのを参照すれば明らかなように、私が危篤状態にあるとの噂は、自然とあなたの耳にも入っているだろうに、見舞いの言葉ひとつないのが情けない、ほどの意であり、中宮をめぐる秘密に言及するような文面でないこと、自明であろう。

つづく傍線部Bは、本文に問題があるように思われる。「今は限りと思ひ馴れても」と読めば右のような解釈にもなろうが、「思ひなれても」には脱字があって、もとは「思ひはなれても」であり、自分の命もこれまでということで、この世に執着することはやめようと思っても、といった意であろう。『源氏物語』「賢木」巻に、「（六条御息所は）やうやう今はと（源氏との仲を）思ひ離れたまへるに、」（②八八頁）とあるのが参考になる。同じ語は、右の条の直前にも、「（内大臣は）こひのやまひの、「わすれん」と思（ひ）はなるゝによらぬぞ、なによりもくるしきしたの御なやみなりける。」（四二五頁／14オ）と見えていた。後文は、それにもかかわらず、長い年月をやり過ごしてきたけれど、万事につけて、「二度とは、いつになっても（思うようにはなるまい）」といった覚悟が自然と固まる人生の最後に、よりによって、心残りに思われることが尽きないのでしたよ、とつづく。この期に及んで、消せない執着が残っている、というのである。ちなみに、このあたりも、さきの柏木の手紙のつづきに認められた次の歌を、下敷きに

したものとおぼしい。

いまはとて燃えむ煙もむすぼほれ　絶えぬ思ひのなほや残らむ（④二九一頁）

死んでもこの世に残りつづけるであろう、断ち切りがたい愛執の念を詠んだ歌を、その表現は、初句に対応する「今は限りと思ひ離れても」以外はほとんど跡形なく解体しつつも、このままでは死んでも死にきれないとする、切ない思い（それが骨肉の情であることは、追って明かされる）へと転じたものであり、自在な筆づかいである。

さらには、直後の「いと便なくおぼさるらめど」についても、中宮の秘密にかかわることを読み取る必要はまったくない。あなたは、私の最後の愚痴を聞かされるということで、なんと厚かましく頼み込んでくることかとお思いになろうけれど、ほどの意。つづく、「世とともに晴るけやらぬ夢語りも、人づてならで、問ひ合はせきこゆべき。」において、はじめて、遠回しに中宮の件を匂わせ、歌の下の句「雲居の月の影を見ぬかな」によって、実の娘に会えない嘆きを表明したのである。そして、手紙の最後に記された「また誰にか愁へきこえさせん」の一文も、夕霧を枕頭に迎えたさいの柏木のことばに、「かかるいまはのきざみにて、何かは漏らすべきと思ひはべれど、なほ忍びがたきことを誰にかは愁へはべらむ。」（④三一五頁）とあるのを想起させる。

縋るような思いで送られてきた内大臣からの悲痛な手紙を読んだ侍従の内侍は、秘密を知る身として同情に堪えず、返事を書く。その手紙について、従来は、和歌から始まるものと解している。しかし、地の文とされる傍線部Cこそが、じつは手紙の書き出しなのではないか。

侍従の内侍の歌は、内大臣の歌にいう「雲居の月の影」とはなにか、自分には理解できないと、わからないふうを装いながらも、「かき暗れし心の闇」とあることを承けて、「まがふ闇路を聞くぞかなしき」＝あなたの苦悩を知ると悲しい、と応じたものである。ちなみに、傍線部D「まがふ」は、「心の闇」との対応からしても、「まどふ」の誤りであるに違いない。『研究』『全対訳』では、当たり前すぎて、ことさら指摘に及ばずとの判断のようである

が、この贈答歌が、

人の親の心は闇にあらねども子を思ふ道にまどひぬるかな（『後撰和歌集』雑一・一一〇二番・兼輔朝臣）

によるものであることは、やはり確実に押さえておきたい。[4] そして、傍線部C「たゞそこはかとなく、」は、内大臣の手紙の意図をしっかり理解しつつも、その内容が内容だけに、表向きは、私にはどこがどうとよくはわからない、それでも、ただ……の気持ですと、「……」の部分を歌で表現したものと見られる。つまり、「たゞそこはかとなく、……をきくぞかなしき」は、ひと繋がりに読むべき文章なのであって、歌のみが独立したメッセージになっているわけではないのだ。よって、ここが手紙の書き出しだと考えたい。もちろん、「とあるを、」につづけて、手紙の書きざまについての説明と解することもでき、その理解でなんら問題ないのであるが、歌の前に置いたさりげない一文と捉えたほうが、迂闊には内大臣への共感を表出できない侍従の内侍の立場からの、それでも精一杯同情の念をこめた文面となるように思うのである。

死の床に就く内大臣を見舞った侍従の内侍は、中宮あての手紙を託される。「一五　内大臣を急ぎ見舞う侍従」の段では、前段にひきつづき、「柏木」巻からの詞章の流用が目につくので、以下に、対応する箇所を摘記しておく。

われ（＝内大臣）はけうそくにをしかゝりてまちをはすかさま、[A] ありし人ともみえず、いとかなしげなるを、（侍従の内侍は）みるよりいみじうぞあはれなる。（中略）（内大臣は）よはき御心ちに、いとおほくの給（ひ）て、「（中略）たゞか（＝中宮）の人しれぬ御心ひとつにだに、[B]「あはれ」とおぼしめししらば、[C] それば

A（柏木の夕霧へのことば）その人にもあらずなりにてはべりや。（三一四頁）

B（柏木の手紙）あはれとだにのたまはせよ。（二九一頁）

かりをなんこのよの思ひいでに」との給（ひ）もやらず、（中略）[D]御てもわならけど、かたばかりかきつけ給（ふ）。「（中略）」とばかり、[D]かきもはてられねば、はかなくひきむすびて、うちをき給（ふ）。「[E]よし、さらばとくまいらせ給へ。[F]かきみだる心ちし侍るは、たゞいまをすごさずもこそ」との給（ふ）に、（中略）（侍従の内侍は）[G]たちもやられずぞむせかへらるゝ。（四二六～四二七頁／15ウ～16ウ）

C（柏木の小侍従へのことば）いでや、この煙ばかりこそはこの世の思ひ出ならめ。（二九六頁）

Dいみじうわななけば、（柏木は）思ふこともみな書きさして、（二九一頁）

E（柏木の小侍従へのことば）よし。いたう更けぬさきに、帰り参りたまひて、（二九七頁）

F心地せむ方なくなりにければ、（柏木は）「出でさせたまひね」と、（夕霧に）手かききこえたまふ。（三一八頁）

G（小侍従は）えも出でやらず。（二九七頁）

内大臣の手紙を携え内裏に戻る車中も、侍従の内侍は涙をこらえられなかった。つづく、「一六　中宮へ内大臣の文を手渡す」の段を見てみよう。

**10**そばなるみ丁のかたにうち気色ばみて、（侍従の内侍が）[A]「うゑのけいせよと侍ることなん」とさゝめけば、（中宮は）あやしくおぼしめされて、[B]すこしよらせ給（ふ）。「御ぐしのかゝり、御ひたいのほどなど、なをたぐひなくもをはしますかな」と、うちまもらるゝにも、いかにぞやいづくとはおぼえねど、ふと（内大臣の面影が）思ひいでらるゝにも、むねぞつぶるゝ。[C]「人〳〵のちかくさぶらふも、あやしうとゝむ（が）べければ、なをいかゞせん」と思（ひ）て、御き丁すこしをしよせて、猶うち気色ばみ、とみにけいしやらぬに、いとあやしうおぼしめせど、「猶やうこそあらめ」とちかくそひふさせ給へるに、まづ[D]いひやることなうなくさま、いみじく御むねつぶれて、あきれてをはします。（四二七～四二八頁／17オ～18オ）

侍従の内侍は、内大臣の手紙を中宮に見せる機会を窺う。帝が清涼殿に還御してすぐ、中宮には、「とくのぼらせ給へ」（四二七頁／17オ）との伝言がもたらされたが、「大とのよりの御文御らんずるほど」（同）であったので、侍従の内侍は御帳台に近寄り、なにか訴えたげな様子で、傍線部Aのように小声でいう。ここに見える「上」については、『全対訳』が「帝」（四一七頁）と明示するほかは、誰のことか、問題にもされていないようである。しかし、これを帝と解するには、すでに帝の伝言は中宮に伝わっているので、あらためて侍従の内侍から帝の伝言があるというのも、思えば妙な話である。その「妙」に思ったことを、「あやしくおぼしめされて」と表現したとも解せるが、そもそも帝の伝言を伝えるのに、侍従の内侍が「うち気色ば」むことじたいが「妙」である。すると、この「上」とは、帝以外の別人であるとは考えられないだろうか。そこで浮上するのが、中宮の「（母）上」であり、侍従の内侍の以前の主人でもある、対の尼である（後文では対の尼のことを、「はゝうゑ」［四三〇頁／22ウ・23オ・四四一頁／40オ］と記している）。「母尼上からの、「中宮様に啓上せよ」との伝言を預かっております」との侍従の内侍のことばに、あの引っ込み思案のお母様からだなんて、なにごとかしら、不思議だこと、と中宮はお思いになって、といったながれで解することができ、不自然さもないように思うのだが、いかがであろうか。

傍線部Bは、句点、鉤括弧の位置とも、『研究』『全対訳』『集成』に違いはないのであるが、すこし異なる読みかたを提案したい。まず、「すこしよらせ給（ふ）。」では句点にせず、連体形で「御ぐしのかゝり、御ひたいのほどなど、」にかかると見る。すると、近寄って来た中宮を見つめる侍従の内侍の心中も、「なをたぐひなくもをはしますかな」のみとなる。些細なことではあるが、そのように改めることで、人物の動きと、それと呼応する別の人物の心情とが、より自然なものになると思うのである。

傍線部Cも、鉤括弧の位置についての異見である。『研究』には鉤括弧がないものの、『全対訳』と『集成』が同様に括っている。これを、「なをいかゞせん」のみを侍従の内侍の心中と解したいのである。すると、傍線部Bとも

ども、連続する心内語が、いずれも「なを……」と短く表現されていることになる。内大臣の哀訴になんとか応えようと、周囲の状況に注意を払いつつ機会を窺うものの、なにも知らず屈託のない中宮を前にして、なおどうすべきか逡巡する侍従の内侍の気持――それを従来は、やや冗漫な心内語として処理してきたところが、一気に引き締まった文章となると思うのだが、いかがであろうか。

傍線部Dは、とくに問題があるようにも見えないが、やや違和感を覚えるので検討する。ひっかかるのは、「いひやることなう」という言いまわしである。これはふつうなら、「いひやるかたなう」と表現するところではないか。もちろん、「言ひやる言無し」という表現じたいは可能であろう。『新編全集』を検索すると、かろうじて『住吉物語』下巻の、「（継母は）口うち開きて、目をうちしばたたきて、青く白くなり、言ひやることなし。」（一三三頁。底本は大東急記念文庫蔵本）という例を拾うことができる。ただし、最善本とされる成田図書館蔵本を底本とする武山隆昭校注『住吉物語』（一九八七年、有精堂）では、「口うちあきて、目しばたたきて、顔あをくあかくなして、言ひやるかたなくて、そぞろきゐたりける。」（九二頁）となっている。また、同じ『住吉物語』内には、「筑前も言ひやる方なく、かたはら痛く思ひけり。」（上巻・三四頁）ともあり、かならずしも同一底本内で表現が一貫しているわけでもない。『日国大』の「いいやる」の項には、「③言い表わす。口に出して言う。」意の用例に『在明の別』のこの箇所が掲げられていて、いささか目に立つ。ただし、一緒に掲出された用例が、『栄花物語』巻二「花山たづぬる中納言」の「あなあさましやとも言ひやらん方なく思されて」（①一〇九頁）なので、やはり「こと（己止）」は「かた（可多）」の誤写ではないか、との疑いが拭えないのである。

中宮からの返事を見届けた内大臣は、差出人への返却を命じたあと、ついに息絶えた。「一九　悲しみ深い四条の上」の段では、夫である左大臣の援けのもと、四条の上が葬儀を取り仕切ったことが記され、あわせて、右大臣の

感慨が記されている。

11右のをとゞもとしごろきしろひいたる御みなれば、むかしよりよくもあしくもをなじさまにいひならべられ給（ひ）し三人の、みなうせ給（ひ）ぬるを、いとかなしくおぼさる。（四三〇頁／22オ）

傍線部Aは、「年ごろきしろひ居たる御身なれば」と読んで、なんの問題もなさそうだが、あるいは「きしろひわたる御身」で、長年（たがいに）しのぎを削ってきた身の上なので、とも解せそうに思う。「い（以）」を「わ（和）」の誤写と見るわけである。

傍線部Bは、『研究』『全対訳』『集成』ともに、「三人」を「二人」と改訂し、『全対訳』では、「かねてから三位中将（今は亡き内大臣）、右衛門督（今の右大臣）と権中納言（今は亡き右大将。実は女院としていま健在ではあるが）と、三羽烏であった人々が、二人まで亡くなってしまわれたこと。」（四二四頁）と説明する。しかしここは、「三人」のままにしておくべきではあるまいか。右大臣は、昔から、なにかと話題になるたびに、一緒にまとめて評判されることの多かった三人が、（自身を除いて）みな亡くなってしまわれたのを、じつに悲しいとお思いになる、というのである。

実父が内大臣であることを知った中宮は、出生の秘密をもつことに後ろめたさを覚えるいっぽう、実父の死にも服喪できない悲しみに沈んでいると、今度は母対の尼が体調を崩し、ほどなく亡くなった。その間にも、左大臣の妻右大臣の大君は女子を、年が改まると、今度は四条の上が男子を生んだ。「二二　四条の上、男児を生む」の段では、相次ぐ人々の死に、対の尼の母である関白の北の方が出家したことが記され、つづいて次のようにある。

12さるは大との（の）・大宮もさまぐ〳〵はかなきよを御らんずるに、御ぐしいとすゞろはしくて、（関白の北の方と）をなじさまにおぼしなりぬ。（四三一頁／24オ）

太政大臣の妻大宮も出家した、とする記述であるが、不審なのは、「大との大宮も」の文字列である。『研究』『全対訳』『集成』いずれも、「大殿」と「大宮」とが繋がるようにとの配慮から、「との」のあとに「ゝ」か「の」を補う。しかし、そのように表現する例が、ほかにあっただろうか。「大殿、大宮」と表現されるとき、それはつねに一対の夫婦としてであり、巻二の二例（三九五頁／40オ・四〇一頁／50オ）、巻三の一例（7に既出）、いずれも同様である。しかもすぐあとに、出家した妻とは一線を劃して、「大との」（四三一頁／24オ）のほうは、政務への関与に未練のあることが記されている。だとすれば、「大との大宮も」の文字列は、「大宮も」とだけ書けばよいものを、これまでにも「大との大宮」と書き記した記憶のあることが災いして、「大宮」の前に、不要な「大との」の文字を書き加えてしまった、といった事情ではなかったか。よって、ここは、「大との」の三文字を削除し、「さるは、大宮も、さまざまはかなき世を御覧ずるに、」と改訂したいと思う。

つづく、「二三　院、四十の賀を祝う儀式」の段に入り、内大臣に先立たれた父関白が、悲しみのあまり、公務への参加も見送っていたのが、院の四十の賀に供奉するため出て来たことが記される。そのおり、左大臣は、叔父の関白を励ますべく、兼官していた左大将のポストを返上し、関白の子である権中納言（故内大臣の異母弟）に譲ったとして、次のようにある。

13（関白の）いみじき御なげきのなぐさむことなきを、左のをとゞいと心ぐるしうみ給（ひ）て、大将をたてまつりて権中納言にゆづり給（ふ）。我（が）御みはかくてしも御おぼえいとことなるべし。なをずいじん給はり給（ふ）。（四三一～四三二頁／25オ）

傍線部の最初の文字を、『研究』（二九三頁）では「を（越）」と判読し、「譲（ゆづ）り給ふを、御身（み）は……」と読んでいる（『全対訳』も同様［四三二頁］）が、『集成』のように、「我」と読むのが正しい。よって、「ゆづり給（ふ）。」で句点と

なる。そのあとの理解について、『全対訳』では、「左大臣殿のお人柄は皆々から大層慕われるに違いない。なお、権中納言は、随身までも賜りなさる。」（四三三頁）と訳すのだが、どうにも釈然としない。素直に解釈すれば、左大臣ご自身は、兼任の左大将を返上し、権中納言に譲ったことで、かえって帝のおぼえも格別にめでたいということであろう、左大将在任時と変わらず随身を賜りなさる、といった意味になる。すると、「かくてしも御おぼえいとことなるべし。」は挿入句であるから、句点ではなく読点となり、「我が御身は、なほ随身賜り給ふ。」という文に、割って入ったかたちだと理解される。もっとも、左大臣にも随身はつくはずなので、左大将を返上したからとて、急に取り上げられるとも思えないのだが、故右大将の場合もそうであったように、近衛の大将につき従ってこその「随身」、というイメージがあるのだろう。ついでに、「権中納言は、随身までも賜りなさる」と解するのも、主語を取り違えており、従えない。

院の四十の賀が催され、春宮の笛と女院の琵琶との合奏により、七人の天女降臨という奇瑞が惹き起こされたあと、「二七　女院にも天女の匂い」の段では、春宮坊の官人たちを昇叙すべしとの宣旨が下される。

14「かゝるめづらしきことには、なにごとをかは」と（帝は）おぼしめして、春宮の宮づかさ、あるかぎりかゝい給はるせんじあり。左のをとゞ一位にあがり給（ひ）、左大将正二位、つぎ〳〵におほくひきこしつゝ、A むれたちよろこびにつられてぶたうす。さるはB こ右大将どのゝ御すゑにははづかしかるべき御みの、天人うとさぞかし。つれなくぶたうし給（ふ）。女院はC いましもたをりしむかしもおぼえぬはなのにほひをみたまひても、いとあはれにさま〴〵のさきのよおぼしつゞけらる。（四三五頁／31オ～31ウ）

傍線部Aについては、「ともども喜びの心につられて舞踏の礼をしなさる。」（『全対訳』四四三頁）と解されているが、「喜びに釣られて」と読むなど、論外であろう。『日国大』で連語「つられる」を引くと、いきなり明治時代の

小説の用例が挙がる。ここの「つられ（礼）て」は、「つらね（祢）て」の誤写であるに違いなく、「群れ立ち、喜びに、連ねて舞踏す。」と読むべきところなのだ。昇進した一同が、お礼のために、連れ立って拝舞をした、というのであり、似た表現は、『うつほ物語』「吹上下」巻にも、「（仲忠以下の五人が）連ねて下りて舞踏す。」（①五三二頁）と見える。じつは、すでに巻一「七四　左大臣邸、ある限り加階」の段において、正月二日、中宮（＝女院）のもとへ行幸があったさい、若宮と対面した帝により、関係者全員を加階させるとの宣旨が下されると、「いま宮の御よろこびに、うぢ[5]のかんだちめつらねてはいしたてまつり給（ふ）。」（三六一頁／86ウ）のごとくに、こことよく似た表現がなされていたのである。

傍線部Bのうち、「はづかしかるべき」は、『研究』（二九九頁）『全対訳』（四四二頁）では「いつかしかるべき」と読んでいるものの、『集成』が判読したように、「は（八）」の文字と認められる。よって、ここは、「故右大将殿の御末には、恥づかしかるべき御身の天人うとさぞかし。」と読め、亡くなったあの右大将殿のお子様にしては、恥ずかしく思うのが当然の、天人らしさのないお姿であることよ、ほどの意となろう。そして、「つれなく舞踏し給ふ。」とつづくのだが、この短い一文によって、いったいなにを表現しようとしたのか。左大臣の拝舞を「つれなく」と形容する意図とは？

遙かに遡り、巻一、二月に宮中で催された梅花の宴において、右大将は再度の奇瑞を起こしていた。そのさい、「三五　再び奇瑞を招く右大将」の段での帝は、「「よのすゑまでもかきをかんため」と、権大納言にくはゝり給（ふ）よし」（三三三頁／40オ）宣旨を下し、それを承けての右大将の様子が、「気色ばかりぶたうし給えるようゐ、さまかたち、御ぞのにほひ、いふはをろかなり。」（三三三頁／40オ～40ウ）と描かれ、絶賛されているのだ。すなわち、左大臣の拝舞を「つれなく」と形容するのには、しかるべき理由（わけ）があった。かれの「つれな」い拝舞とは、あの日の父右大将の拝舞と比較しての決定的な違い――右大将の纏う「天人」を思わせる「世の常ならぬ」美質や魅力が、そ

の子には欠片も受け継がれていないことに対する、辛辣な評語なのであった。こうした物語内での照応関係に気づかなければ、たしかに、「意味不明」（『研究』二九九頁、『全対訳』四四二頁）とするほかなかったであろう。右大将歿後も、物語はかれの不在にこだわりつづけ、かれが欠けたことによる空白は、同一人物である女院をもってしても埋めることはできず、ましてや、左大臣の存在によって、どうにかなる性質のものではなかった。巻二、巻三の主役といえども、絶望的な「天人」のハードルを前にしては、「世の常」の人生を歩むほかなかったのである。

傍線部Cは、従来「みたまひ」と読まれてきた「み」の文字が、微妙であるように思われる。写真複製を素直に読めば「え（衣）」であり、「み（三）」の書体とは見えない。よく似た運筆として、巻二に、「かけてえしり給はぬも」（四〇七頁／59ウ）とあるのが指摘できるが、ここについて、「みしり」と読むようなことは、絶えてなかった。

また、「さま〳〵のさきのよおぼしつゞけらる」の傍点を付した「の」も落ち着かない。ひとりの天女が、「この世にはいかゞとゞめむ」（四三四頁／29ウ）といいつつも、女院に奉った「はなのひとえだ」（同）は、昇天後にも女院の手もとに、証拠の品として残っている。「今しも、手折りし昔もおぼえぬ花のにほひを得たまひても」というのは、天女が「君とわがむかしたをりし」（同）と詠みかけたにもかかわらず、女院には肝腎の過去が思い出せないため、「花の一枝」を手に入れながら、「あはれに、さまざまの前の世おぼしつづけらる。」となるので、傍点を付した「の」の文字は、「に」とでもありたいところである。「さまざまの前の世」ではやはり不自然であり、「さまざまに……おぼしつづけらる。」と解したい。

この物語に構えられた女院をめぐる趣向の、一大種明かしの場面ともいえる院の四十の賀も終わり、「二八　太政大臣、大堰隠棲を思う」の段について検討する。

15大とのこのたびの御まじらひに、御ゑいぐわひらけはてさせ給へれば、いまはしづかなる御すまゐにとおぼし

さだむるを、院、女院、うち、春宮、后宮、我も〳〵とをしみきこえさせ給（ふ）。いましもよにをはせざらんやうに、うらみの給はすれど、「いとわりなきことなり」と、きこえかえさせ給（ふ）。（四三六頁／31ウ～32オ）

傍線部について、『全対訳』の現代語訳は、

太政大臣は、今こそ辞表を奉って、入道したいと恨み言をおっしゃるけれども、院、女院たちは、「それは大層困ったことです」と、〝たってもう一度〟とお答え申し上げなさる。（四四五頁）

となっているのだが、首を傾げたくなるような解釈である。素直に読めば、「今しも世におはせざらんやうに」というのは、太政大臣が閑居を決意したからといって、すぐにこの世を去るわけでもないのに、まるで今が死別のときであるかのように、ほどの意。「恨みのたまはす」るのは、太政大臣が閑居に入ることを「我も我もと惜しみきこえさせ」た、「院」以下の人々である。そして、「いとわりなきことなり」＝まったく理不尽な言い分だ、として「聞こえ返」す＝翻意を拒むのは、もちろん太政大臣である。

賀茂の祭が過ぎた四月の下旬、太政大臣は、大堰に造営しておいた御堂に移り、五月には出家を果たす。源氏の入道大殿も亡くなり、さきの関白の北の方と大宮の出家ともあわせて、女院など物語の第一世代の親の世代の人々が、次々に表舞台から退場する。

その一方で、第二世代の中心である左大臣は、どのような状況であったか。「二九　源氏入道ついに逝く」の段に、次のようにある。

16左のをとゞは[A]思ひそめしさまならぬすくせを、おぼしわするゝよなく、むすぼゝれすぐし給えど、あさゆふの御なぐさめ、[B]さま〴〵の御いのりにかけとゞめられ給（ふ）にや、さすがにひたすらもえいとひはなれ給はず、しゐてそむきすてんと人（も）のもどき、つみさり所なく、物ぐるをしかるべき御みのほどに、たゞ物思ひのなぐさ

むよなくて、さすがにあなたこなたと心ぐるしきことを、心のひまなくすてがたくのみなげきありき給（ふ）。

（四三六～四三七頁／33オ）

傍線部Aについて、『全対訳』では、「左大臣は、女院に似た方を得たいものと、心に思い染めてきたことが実らぬ宿世を思い忘れなさる日とてなく」（四四七頁）と現代語訳するが、いかがであろうか。左大臣にとって女院への恋情とは、「まことにみをかへ、あらぬよならでは、かく思ふてふことをだにうちいづべきものとは、かけても思（ひ）より」（巻二・三七二頁／3ウ）ぬものであり、現世での不如意を嘆くような性質のものではなかった。ここで、「おぼし忘るる世なく」、じしんの「宿世」について鬱屈した思いを抱かせているのは、むしろ、巻二、「三　東宮の女御と結ばれなかった恨み」の段に、「（女院に）よそふばかりならねど、なをよのつねにはこよなかりしむさしの、くさのゆかりを、ひきたがえけんちぎりのうらめしさを、わするゝよなけれど」（三七二頁／4オ）とあったのを承けたもの、と見るべきである。左大臣と春宮の女御との間にかつて縁談のあったこと、それゆえ左大臣が、期待どおりにならなかったかの女との宿縁を残念に思っていたこと、すでに巻一末尾に見えたことである。そのような物語の大きなながれを確認したうえで、「三〇」段から「三四」段にわたる緊迫の山場へと、これから向かうわけなのだ。

傍線部Bについては、『研究』（三〇二頁）『全対訳』（四四六頁）揃って「影とどめられ」と解している点だけは、誤りを正しておこう。『集成』に濁点をつけていないことからも推察できるように、ここが「掛け留められ」と読むべき箇所であること、論を俟たない。「（命を）掛け留む」と表現する例は、『源氏物語』中からでも、「あたらしく惜しき人（＝藤壺）の御さまを、心にかなふわざならねばかけとどめきこえむ方なく、」（「薄雲」巻②四四六頁）、「いかなるわざをして、これ（＝紫の上）を救ひ、かけとどめたてまつらむとのみ夜昼思し嘆くに、」（「若菜下」巻④二四一～二四二頁）など、容易に探し出すことができる。

いよいよ、「三〇　左大臣、東宮の御所に寄る」の段へと入り、宮中行事も少ない八月のある夕刻、「むかしおぼしわするゝよ」（四三七頁／34オ）とてない左大臣は、女御の居所となっている宣耀殿を訪れた。細殿のあたりで立ち聞きしていると、若い女の声がする。

17しばしたちきけば、いとわかきけはひして、――たゞこゝもとにうちふすなるべし、――「ときはのやま」などひとりごつ。なにばかりの人のこゑともみゝとまるまじきを、おくのかたより人きて、「とくまいらせ給へ。御ゆははじまらんとす」といふなり。いとちかうぞつかうまつるべき。（四三七～四三八頁／34ウ～35オ）

傍線部は、「何ばかりの人の声とも耳とまるまじきを」と読んで、とくに問題があるようにも思えないが、写真複製によってこの物語を読んでいると、「うゑ」とあるべきところ、「こゑ」としか読めない字形が続出していたことに、想い到る。2にも、「四条のこゑ」の例があった。すると、ここも、「何ばかりの人の上とも耳とまるまじきを」と読むことが可能となる。すると、春宮の女御のことしか頭にない左大臣にとって、女房の理由ありげな独り言を聞いたからといって、どんな事情をもつ女かなど、興味をかき立てられそうもないが、と解することができ、「人の声」と読むよりはるかに自然だと思うのだが、いかがであろうか。

左大臣は、中宮に近侍するらしいこの女房と語らうや、たちまち靡かせてしまう。そして、「三一　再び宣耀殿に忍び込む」の段へと移る。以下は、女房が左大臣に説得され、手引きするに到る場面である。

18（左大臣）「こよひはのぼらせ給ぬにや」[A]。（女房）「さも侍らず。ひる女院の三位どのなど、まいり給へりとぞうけ給はりつる。あめにえかへりまいらで、さぶらはるれば、びんなくて」ときこゆ。「さりや、いとよかなるは。（中略）あが君、猶たばかり給へ」といみじうの給（ふ）に、うつし心はたうせにければ、「身をすてゝこそは気色み侍らめ」といふまゝにかくるゝを[B]、ひきあけてのぼりぬ。（中略）いたくふけゆくほどに、やをらをしあけ

て御袖をひけば、（左大臣は）ゆめにまどふ心ちして、たどりまいり給えるに、（下略）（四三九頁／36ウ～37ウ）

傍線部A、左大臣の問いかけの読みを、『研究』（三〇五頁）『全対訳』（四五四頁）では、「今宵は上らせたまはぬにや」とするのであるが、「給ぬ」の字面を「給（は）ぬ」と未然形で読むのは、そう読むほかない事例が存在する（巻二に、「まいり給ぬさきより」［三八〇頁／15ウ］とあるのは、「給（は）ぬ」としか読めない）ことを承知してはいても、やはり、かなり稀なケースというべきであろう。「給ぬ」の「ぬ」を完了の助動詞と見れば、「のぼらせ給（ひ）ぬにや」となるが、「にや」につづけるためには「のぼらせ給（ひ）ぬるにや」と、「る」を補う必要がある。では、どちらの読みが、女房の応対とうまく整合するであろうか。

女房は、まず、「さも侍らず」＝左大臣が訊いてきたような状態ではない、と答え、昼間に、女院のもとから三位殿などが参上していると聞いていたが、雨のため帰参できず、そのまま滞在中なので、女御がそちらにお上りになるには不都合な状況だ、という。それを承けて、左大臣は、ならば、女御がここを離れない今宵こそ、逢うのにまたとない好機だ、として、手引きを懇願する。つまり、女房は、今宵の女御は、春宮のもとへ行きにくい状況だ、といっているので、「さも侍らず」も、今宵はもうお上がりになったのか、に対する返答でなければ、辻褄が合わない。『全対訳』では、「今宵は、女御は帝（ママ）のもとに参られぬのか」（四五五頁）と訳すが、これに見合う返答は、「さに侍り」とでもなろう。よって、ここは、「今宵は上らせ給ひぬるにや」との読みを支持することとし、本文もそのように改めたい。

左大臣の懇願もだしがたく、女房は、「身を捨て」る覚悟で協力する[6]わけだが、傍線部Bの読みが誤っていると思われるので、正しておきたい。従来は、「かくるゝを」と読んで、女房が姿を隠すと、と解し、つづく「引き開けて上りぬ。」の主語は、敬語がないのを不審としつつも、左大臣だとしている（『研究』三〇六頁、『全対訳』四五六頁）。しかし、「かく」と読まれてきた文字は、写真複製をよく見ればわかるとおり、「く（久）」一文字である。よってここ

の本文は、「……といふまゝに、くるゝをひきあけてのぼりぬ。」と訂正せねばならない。「くるゝ」は枢戸のことであり、回転式の扉をいう。枢戸を引き開けて、女房は女御の御前に向かった、というのだ。当然ながら左大臣は、まだ動いていない。残された左大臣が落ち着かぬ心持で待っていると、「いたくふけゆくほどに、やをらをしあけて（女房が左大臣の）御袖をひ」く。すなわち、女房は、枢戸を「引き開けて」室内に入ったが、しばらくして、同じ枢戸を「押し開けて」戻ってきた。かくして、ようやく、部屋の奥へと左大臣を手引きする段取りとなったのである。

つづく、「三一　女御に迫るが、目的果たせず」の段において、左大臣に対する春宮の女御の対応が、次のように描かれている。前半の文脈がとくに辿りにくいので、挿入句をそれとわかるように示し、私見により、文意理解に必要な情報を括弧内に補うことで、通読に堪えるよう工夫した。先行研究との違いについては、細かく見てゆくと収拾がつかなくなりそうなので、いっさい省略する。

19をなじ女（＝母を同じくする異父姉妹）ときこゆれど、――あね君（＝故対の尼）やいたくいはけてもをはしつらん（男の接近を拒み切れないことがあったが）、――（春宮の女御は姉君とは違い）さるべきふしぐ（＝男への臨機応変な対応が必要はとき）はいとよくおぼしわきたる人の、をなじ女御、宮す所ときこゆれど、あながちに宮（＝春宮）に思ひつきゝこえ給える（人で）、――A御よはひ、はた（春宮に）いとはるかにまさり給へり。――（年齢的にも）よろづの事ふかく思（ひ）わきまへられ給える（成熟した）心の中なれば、（年下の左大臣にとって春宮の女御の態度は）いといふかひなげに、あなづらはしかるべくもあらず、（一見すると）あえかにらうたげなる物から、（実際には）ころものせきはいとよくく、みこめ給える（春宮の女御の）御よういこよなきに、（あまりの隙のなさに左大臣は）いとゞねたさそひて、（春宮の女御に）いみじきことをうらみつゞけ給へど、人〳〵いとちかくふしたるけはひどもわづらはしきに、B<u>をとこ</u>もなさけなくはえみだれたゝせさせ給はず。（四三九～四四〇頁／37ウ～38オ）

なお、傍線部A「御よはひ」について、前掲妹尾論文では「御けはひ」の誤写と見て、本文を「あながちに宮に思ひつきゝこえ給える御けはひ、はた（ほかの女御・御息所に）いとはるかにまさり給へり。」と解し、従来は、「はるかに姉さん女房であることを強調したかのように誤解されて」いた文脈理解について、「ここで問題にしているのは東宮との年齢差ではなく、他の女御や御息所たちに比べて、宣耀殿の女御がはるかに一途に東宮を慕う気持ちが強かったということであるはずである。」（三七一頁）と説明している。傾聴すべき意見であるが、いまは、本文を改めることはせず、挿入句によって、春宮の女御にとくに分別が備わっている理由を説明し、若い左大臣には手強い相手であることを強調した記述となっている、と見ておく。

また、傍線部Bは、従来「をとど」と判読されてきたところであるが、写真複製を素直に読めば「をとこ」である。やや唐突の感はあるが、官職でなく「男」と呼び捨てても違和感のない場面なので、こちらに従いたい。左大臣を「をとこ」と呼ぶ例は、巻二、「一四　再び北の方を訪ねる左大臣」の段に、「をとこは、なをあり〳〵てもりいでんなとり川を、「いかにせん」と思（ひ）みだるゝ、かぎりなけれど、女はさしも（行カ）おぼしたらずや。」（三八一頁／17オ～17ウ）と見える。ちなみに、この物語において、「大臣」を表す仮名表記は、「をとゝ」が圧倒的に多い。その点でも、「をとと」はイレギュラーである。

なお、「衣の関はいとよくくゝみこめ給へる御用意」によって、迫る左大臣を拒みとおす春宮の女御の様子からは、いずれも男を厳しく拒絶する、帝に添い臥されたおりの寝覚の上の、「衣ばかりは引き交はさせたまひたるに、いみじう心強う、引きくくまれたる単衣（ひとへ）の関」（『夜の寝覚』巻三・二七七頁）とある描写や、道成の求愛を拒む飛鳥井の女君の、「この大夫、衣の関を恨みわぶれど、」（『狭衣物語』巻一①一四九頁）とある記述などが想起される。

左大臣が苦衷を歌で訴えると、かろうじて春宮の女御の返歌を得ることができた。女御の苦しそうな様子に、手

引きをした女房の少将（ここではじめて女房名が記される）が、たまらず左大臣を御前から押し出したので、左大臣は、夜陰にまぎれて退出する。「三四　手引きした少将も困惑する」の段での、退出後の左大臣の様子を見てみよう。ここでも、私見により、文意理解に必要な情報を括弧内に補い、読みやすく整えた。先行研究との違いについても、省略に従う。

20（春宮の女御と別れたあと、左大臣は）ひごろよりけに心みだれまさりて、よろづのこと物うければ、いづかた（＝右大臣の大君や四条の上のもと）にも思ひたゝれず、（代わりに）人もをはせぬ二条どの（＝入道太政大臣邸）にぞ、（牛車を）やらせてをはしぬる。（太政大臣居住中は）さばかりなりし（邸内の）御いきをいかきさまし、人かげなくてほどなくあれぬべきを、宮（＝中宮）の（里下がりに）いでさせ給はんため、（左大臣は）このをとゞ（＝二条殿）もかくときゞかよひ物し給えど、なを人をはせぬ所は、（ひとり物思いに耽るには）こよなかるべし、さまゞのふるごと（＝この邸にまつわる出来事の数々を）おぼしいで、はゝうゑ（＝故対の尼）の御をもかげいとこひしくぞながめをはする。さるは、そ（＝母上）の御よういにも（春宮の女御が）いとよくおぼへ給える（＝似ておられたのを、けふ（＝女御と別れた翌日）はことゞなく（＝ひたすら女御のことを）思ひくらし給（ふ）。いつしか（女御あてに）こまかにかきつくし給えるも、（返って来たのは）少将がわたくしごとにて、（女御からのものではない返事に、左大臣の）御めぞとまらぬ。（四四〇～四四一頁／39ウ～40オ）

右の全文が、春宮の女御と別れた直後、その夜から翌日にかけての記述であることを、読み誤らないことが肝要である。

その後、大堰に隠棲した入道太政大臣が病臥したため、見舞いの行幸や行啓がつづく。「三七　夕映えの東宮の姿」の段では、入道と対面した春宮が、なごりを惜しみつつ帰る様子が、次のように描かれている。

21わけいでさせ給（ふ）ゆふばへの御かたち、けちえんなる御ぞのいろにもてはやされたる、にる物なくめでたきを、やがてみたてまつりをくらせ給（ふ）に、とし月ふれどわするゝよなくしのばせ給（ふ）むかしの御かげ、さやかにうつしとゞめたる御ひかりを、いかゞなのめにおぼさん。（四四三～四四四頁／44オ～44ウ）

ここについての解釈が、『研究』と『全対訳』との間で変化している。後者の現代語訳では、

分けいでなさる東宮の、夕映えの美しいお姿、あでやかな御衣の色にもてはやされたそのすばらしさは、似るものなくご立派であり、女院は、ずっとその姿をお見送りなさるにつけても、それはすでに年月過ぎ去ったものの、いつまでも忘れる時とてなく、男装をしておられた昔の自分の面影を、何と東宮が瓜二つに映しとどめておられるそのあでやかさに、女院とて、どうして東宮のことを、とおり一ぺんにお思いなどできようか。（四七三頁）

とあるのだが、「とし月ふれど」以下の主語等の認定が、先行する『研究』では次のようになっていた（〔　〕内の指示は、傍記されているものを本文中に移した）。

〔左大臣ガ〕年月経れど忘るる世なく忍（ママ）ばせ給ふ〔女院ノ〕昔の御影、さやかに〔東宮ガ瓜二ツニ〕うつし留めたる御光を、〔左大臣ハ〕いかがなのめに思さん。（三一四頁）

見較べると、『研究』では左大臣を主語としていたところが、『全対訳』では女院となり、全体を女院で統一したところに違いがある。

しかしながら、春宮を見送る女院が、かつての自分の姿と瓜二つだと感慨深く思う、という文章だとするには、「（女院が）年月経れど忘るる世なく偲ばせ給ふ昔の（自身の）御影」という表現そのものが、いかにも不可解ではあるまいか。『研究』が左大臣を主語としたのには、そうした不自然さを回避しようとの意図があったかとも思われる。ただし、男装時代の女院を知るよしもない左大臣が、かの女のことを「年月経れど忘るる世なく偲」ぶわけも

ない。よって、「見たてまつり送らせ給」うのが、左大臣でも女院でもないとすれば、これは、春宮の見舞いを受けた入道太政大臣以外に考えられない。[7] 主語等を補って校訂本文に改めると、次のようになる。

分け出でさせ給ふ（春宮の）夕映えの御かたち、掲焉なる御衣の色にもてはやされたる（姿は）、似る物なくめでたきを、（入道太政大臣は）やがて見たてまつり送らせ給ふに、年月経れど忘るる世なく偲ばせ給ふ昔（＝故右大将）の御影、さやかに映し留めたる（春宮の）御光を、（入道太政大臣は）いかがなのめにおぼさん。

その後、仏道専一に過ごした入道太政大臣が、安らかに臨終を迎えたことが、「三八　太政大臣の逝去、喪に服す」の段に記される。

22 A御いのり・どのしるしにや、廿日ごろよりをどろ〳〵しくなやませ給（ふ）事なく、いとしづかながらはてさせ給（ひ）ぬ。やまのざす、なにがしのそう正など、B さま〴〵たうときことゞもなどきこえさせ給（ひ）つるも、めのまへのかなしびには、なみだをとし給（ふ）。（四四四頁／45オ～45ウ）

傍線部Aについては、従来、「な」を補って、「御いのり（な）どのしるしにや」と読まれていたのを、前掲妹尾論文では、「御いのりど（も）のしるしにや」と、「も」が落ちたと見るほうが自然だ、と指摘する（三七二頁）。従いたい。

傍線部Bについて、『全対訳』では、「いろいろ尊い極楽のことなどをお話なさるにつけても、左大臣は、目の前の悲しみに、ただ涙を落としなさる。」（四七五頁）と訳しているのだが、いろいろと誤解がある。入道太政大臣主催の仏供養のために参集していた山の座主や何某の僧正たちが、「さまざま尊き事どもなど聞こえさせ給ひつる」というのは、臨終を迎える入道のために、極楽往生することの有り難さの数々を説いて聞かせていた、というのである。入道が臨終正念を保って旅立ったことで、かれらは僧侶としての勤めを見事に果たしたわけであるが、それでも、

目の当たりにした死別という悲しみの前では、高僧たちとはいえ、涙を禁じ得なかった、というのだ。なお、「きこえさせ給（ひ）つるも」の箇所は、『研究』では「聞（きこ）えさせ給へるも」（三一五頁。『全対訳』も同様［四七四頁］）と読まれていたのであるが、写真複製を確認のうえ、『集成』の判読に従った。また、「目の前の悲しび」という表現は、『源氏物語』「御法」巻、紫の上死去の条に見える（④五〇八頁）。

入道太政大臣の薨去によって、近親者は喪に服することになる。「三九　女院、東宮の悲しみ深い」の段の、中宮に関する記事を見てみよう。

23中宮もたゞわが御ことおぼしをきてしかば、あまりいま〳〵しかるべしと、この御なやみのほどにさだめさせ給（ひ）て、ふかくはそめさせ給はず。左大臣どのぞたゞまことの御けうやうにやつれさせ給える。（四四五頁／46オ～46ウ）

中宮の扱いについての箇所を、『全対訳』では次のように現代語訳しているが、疑問点が多い。

女院は、中宮を、実は亡き内大臣と対の尼との間に生まれられたものの、実のわが子とお決めになっておられるけれども、重服はやはりいけないであろうとお考えになって、折からご懐妊中でもあり、お定めあって、深くは喪服に染めさせなさらない。（四七七頁）

まず、「わが御子とおぼし掟て」たのは誰か、ということだが、これは、入道太政大臣であろう。右大将の歿後、（隠された血筋はともかく）表面上はかれの遺児である幼い左大臣と中宮の二人は、すぐさま祖父太政大臣の猶子として扱われたはずである。中宮を、叔母である女院が養子にするというのは、不可能ではあるまいが、太政大臣家の繁栄という観点からは、意味がない。そして、「あまり忌々しかるべし」として、「深くは染めさせ給は」なかった、というからには、元来は、深く染める立場であったはずなのである。すなわち、中宮は太政大臣の娘として、重服

になる予定であった。しかし、前年の若宮誕生といった慶事に配慮したものか、規定どおり喪に服するのも縁起が悪い、ということから、「この御悩みのほど」[8]＝入道太政大臣の病いが重くなり、死を覚悟した時点で、重服とならないように取り決めておいた。そのため、歿後も軽服となり、色の濃い喪服は着なかった、というのである。そうした中宮への配慮とは別に、兄の左大臣の場合は、子が亡き父に対して孝養を尽くすさいの真実の姿――濃い色の喪服を着た、というのが、「左大臣殿ぞ」以下の文意である。

入道太政大臣につづき、その弟の関白も薨去した。物語は、最後の場面、「四一　左大臣に、出生の秘密を」の段に入り、以下は、その全文である。

**24**かゝるまぎれに、中宮のじゞうのないし、いといたくわづらひける、かたちもかえてける、A こうゐのいとしたしくおぼしたりし人なれば、宮、をとゞも、とりわきあはれにおぼしかずまへつるを、（左大臣は）これさへかなしくき、給（ふ）に、いとなめげにかたはらいたけれど、（侍従の内侍は）心ひとつにこめてやみなんと（も）、つみふかゝるべきことを思ひわびて、しのびて（ふれ）（左大臣に）御文たてまつる。「いまはかぎりになりて侍るを、B いとゆゝしくかたじけなくおもひ給へど、つゝみながら、せちにきこしめすべきことも侍る。いかでかいまひとたびさぶらひて、よみぢもやすく」ときこえたるを、（左大臣は）いといとをしくおぼされて、いみじくしのびやつしてをはしたり。まづなりにけるさま、うち御らんずるより、さま〴〵はかなきよのはてを、いとあはれにおぼさるゝに、内侍もいみじくなきて、「きこえいではんべるにつけて、ひとかたならずそらをそろしく、すぎさせ給（ひ）にし御ためとも。（四四六頁／48オ～49オ）

病いを得た侍従の内侍が尼になったとの話を聞いて、左大臣は、祖父太政大臣の薨去につづいて、これまたどうなることかと心配する、というのだが、傍線部Aには、侍従の内侍のことを、亡き母上がほんとうに親密な間柄の

人だと思っておられたので、「宮、をとゞ」も、特別に大切な人の数に入れておられたのが、とある。「宮、をとゞ」については、従来、大宮と太政大臣だとされてきた（『研究』三一八頁、『全対訳』四八〇頁）。しかし、ここは、中宮と左大臣だと解さねばならない。太政大臣と大宮の夫婦については、常に「大殿、大宮」と表現されていること、12において確認したとおりである。二人は対の尼の子であり、亡き母に親しかったがゆえに、侍従の内侍に対して特別に目をかけていた、というのだ。

侍従の内侍は、対の尼の独身時代から近侍していて、左大臣と中宮の実父が誰であるかを知る、唯一の女房である（ほかには、女院のみが知る秘密である）。かの女は、すでに、中宮に実父である故内大臣の手紙を取り次いだことがあった。今度は、左大臣が実父を知る番であるのだが、肝腎のその人＝関白が亡くなってしまい、秘密を知らせることができるのは、今や自分だけになったわけである。秘密を胸にしまったままだと「罪深かるべきこと」と考えるのは、左大臣がなにも知らないまま、実父への孝養をおろそかにすることへの恐れがあるのだろう。

侍従の内侍は、左大臣の来訪を求める手紙を書く。傍線部Bについて、『全対訳』では、「まことに申しわけなく、またもったいないこととは存じますけれども、秘密のことにて、内緒ではございますが、切にあなたに申し上げたいことがございます。」（四八一頁）と現代語訳するが、「いとゆゆしくかたじけなく」というのは、自分が病身で、なおかつ出家の身であるのに、左大臣に頼み事をするのが、縁起でもなく、恐れ多い、との気持であろう。

つづく「おもひ給へど、つゝみながら」について、『研究』では「思ひ給へれど、つつみながら」（三一九頁。『全対訳』も同様［四八〇頁］）と校訂していたのだが、「給へれど」では尊敬の用法になるので、『集成』では謙譲表現となるよう、改訂案を傍記したものと思われる。しかし、私見によれば、「おもひ給へとつゝみながら」の「と」が衍字なのであって、もとは「思ひ給へつつみながら」であったと考えられる。「給へ」は謙譲の補助動詞で、動詞「思ひつつむ」に割って入ったもの。遠慮されますものの、の意である。『うつほ物語』「蔵開上」巻に、「年ごろは、身の

数ならぬを思ひたまへつつみて」（②四二三頁）、『源氏物語』「宿木」巻に、「をり便なく思ひたまへつつみて、かくなんとも聞こえさせはべらざりしを、」（⑤四九五頁）などと見える。

「つつみながら」を、『全対訳』のように「秘密のことにて、内緒ではございますが」と訳すと、いかにも秘密を告げたいとほのめかしているように見えてしまうが、そのような文面でないことは、右に述べてきたとおりである。手紙の中で肝腎なのは、むしろその次の、「せちに聞こし召すべき事も（従来「こと、も」と翻字されているが、写真複製を素直に読めば「ことも」である）侍る。」のほうである。ところがこれを、「切にあなたに申し上げたいことがございます。」と訳すのは、どうしたことか。そのような訳になるには、本文は、「せちに聞こえさすべき」とでもなければならない。ここは、ぜひともあなた様がご承知置きにならねばならぬ事柄もございます、ほどの意である。なにか理由（わけ）ありの対面になるであろうことは、ここではじめてほのめかされたのである。

物語の最後、見舞いに訪れた左大臣を前に、侍従の内侍が口を開く。『全対訳』では、「あなた様にまつわる出生の秘密を申し上げるにつけても、一方ならずそら恐ろしく、今まで年月を過ぎてこられた御身のためとも……。」（四八一頁）と現代語訳するが、ここでも、秘密についての過剰な訳出が目立つ。口に出して申し上げますにつけて、程度でよいのではないか。むしろ、ひととおりでなく天の見る目も恐ろしく、のほうに、秘密を意識した侍従の内侍の恐れがこもっている。この侍従の内侍のことばには、『源氏物語』「薄雲」巻において、夜居の僧都が帝に重大事を奏上しようとして切り出したことば、

いと奏しがたく、かへりては罪にもやまかり当たらむと思ひたまへ憚る方多かれど、知らしめさぬに罪重くて、天の眼（まなこ）恐ろしく思ひたまへらるることを、（下略）（②四四九～四五〇頁）

の影が、くっきりと落ちている。そして、「すぎさせ給（ひ）にし御ためとも。」ときたところで、物語全体の結びとなるわけだが、ここをどう読んだものか。

『全対訳』では、なにも知らずに過ごしてきたあなた（＝左大臣）のためとも思って、詳しくお話しします、ほどの意に解しているようである。しかし、「過ぎさせ給ひにし御ため」というのは、（なにも知らずに）亡くなってしまわれたあなたの本当のお父様のため、の意とも解せよう。「薄雲」巻の僧都は、本題に入る前に、

これは来し方行く先の大事とはべることを、過ぎおはしましにし院、后の宮、ただ今世をまつりごちたまふ大臣の御ため、すべてかへりてよからぬことにや漏り出ではべらむ。（②四五〇～四五一頁）。

と前置きしていた。これをそのままここに適用すると、侍従の内侍は、故右大将、故対の尼、故関白、三人のために、左大臣に秘密を告げようとしていることになる。ただし、その中心は、やはり関白のことであろう。かれは、中宮の実父内大臣と違い、左大臣と親子の関係にあることを知らぬまま世を去ったわけであり、当事者が揃って知らなかった秘密を、お父様の供養のためにも、子であるあなたには打ち明けたい、ということになる。僧都の話を聞いた冷泉帝は、「心に知らで過ぎなましかば、（父母の恩に背き）後の世までの咎めあるべかりけること」（②四五二頁）であったとして、深く苦悩することとなるが、左大臣は、どうするのであろうか。

また、最後に置かれた「とも」の二文字は、会話文の一部で、言いさしのまま閉じられたのか、地の文で、「……御ため」とも（え聞こえやらざりけり。）」ほどの、余韻を残した表現なのか、いずれとも、たしかにわからぬことなので、これ以上妄りに臆測を重ねるのは慎むことにしよう。

さて、以上をもって、三巻から成る物語は幕を閉じたはずなのだが、読み終わった綴葉装の本の左の丁（49オ）をめくると、半丁（49ウ）の空白を置いて、見開き左の半丁に、一首の和歌が、思い入れたっぷりに、散らし書きされている。

25 思ひ入のてらのかね〳〵／きくからに

このくれはかり／かなしきは／なし（50オ）

この歌の正体は、いったいなんなのか。『研究』では、「左大臣の心境。或いは天理本またはその親本の筆者が、書写終了時の感慨を一首にしたため、左大臣の心に托して記したものか。」（三一九頁。『全対訳』も同様［四八〇頁］）と注している。物語の内部、外部、どちらに所属すると見るべきか、判断保留というところであるが、たしかに、それを確定することは、じっさい不可能であろう。それでも、この歌からなにを読み取ることができるかについては、十分に検討がなされる必要があるだろう。

『研究』（三一九頁）『全対訳』（四八〇頁）では、この歌を、

思ひ入りの 寺の鐘がね 聞くからに この暮ればかり かなしきはなし

と読んでいる。「思ひ入」の活用語尾を、連用形が名詞化した用法と見たわけである。『全対訳』には、

ただ心に沁み入る寺の鐘々を聞くにつけても、今日の夕暮れほど悲しい思いをすることはない。（四八一頁）

との訳を示す。ところが、『集成』には、「思い入（ママ）のでらのかね（がね）きくからに」（四四六頁）とある。「思ひ入」の活用語尾は、「思ひ入り」、「思ひ入る」、いずれでも文法的に問題はないが、第二句以下は、「野寺の鐘がね聞くからに」と解したものらしい（ちなみに、『新編国歌大観』所収の和歌本文は、「思ひ入るのでらのかねがね」［九〇番］となっている）。

両者は、「思ひ入のてらの」の傍点を付した「の」の文字を、初句と第二句、いずれに所属させるかで、読みが対立する。初句を「思ひ入る（orり）」と読む場合、第二句「野寺の鐘がね」が字余りとなり、このような読みは、反射的に拒絶したくなる。では、韻律の整う「思ひ入りの／寺の鐘がね」でよいかというと、これにも違和感がある。そもそも、「思ひ入りの……」という表現そのものが、『新編国歌大観』内においてまったくヒットせず、『新編全集』を検索しても、近世の一例しか見出せないうえに、ここでの語義ともまったく相違するのだ。

さらに、両者の違いは、「寺の鐘」と「野寺の鐘」とで、和歌の表現としてどちらが適当か、という問題に繋が

る。そこで調べてみると、「寺の鐘」の用例にさしたる特徴が見出せないいっぽう、「野寺の鐘」には、ここの歌ともかかわりのありそうな例を、指摘できるのである。

有明の月のゆくへをながめてぞ野寺の鐘は聞くべかりける（『新古今和歌集』雑上・一五二一番・前大僧正慈円）

慈円の歌は、後京極良経が建久元年（一一九〇）に主催した「花月百首」のうち、「月歌五十首」での作。野寺の明け六つの鐘というものは、有明の月が沈んでゆく、西の方角を望みながら聞くべきものであった、という。眠りを覚ます鐘の音に諸行無常を観じながら、西に傾く有明月を見て西方浄土を想うこの歌からは、巻二に見える、次のような女院の歌が想起される。

かくれにし月のゆくゑ[9]をわすれずは そなたのそらのみちをたづねよ（四〇六頁／57オ）

かつて右大将であったころ、宮中でささやかな交流をもった承香殿の女が、自分の死後、出家して、大原の庵で過去の思い出を胸に、ひっそりと仏道修行に励んでいると知った女院は、男装時代の筆跡で、西の山の端に姿を消した月（＝私）のことを忘れていないのなら、同じ場所（＝西方浄土）に向かう空の道を見つけて、こちらにいらっしゃい、と誘う。ふたつの歌に直接の関連があるとは考えにくいのであるが、女院の「月の行方」の歌↓慈円の「月の行方」と「野寺の鐘」の歌↓「思ひ入る野寺の鐘」の歌と、ゆるやかに繋がってゆくようにも感じられるのである。

「野寺の鐘」を詠んだ歌は、ほかにも、

聞きなるる野寺の鐘の声のみぞ 暁ごとの友となりける（『新後拾遺和歌集』雑上・一二九八番・内大臣［＝藤原公豊］）

とあり、ここでも明け六つの鐘の音が詠まれている。

今日よりは秋の声ぞと聞かすなり 野寺の鐘の暁の空（『夫木和歌抄』秋一・三八七二番・皇太后宮大夫俊成卿。ただし、『御室五十首』には第四句「野もりの鐘の」とある［二七〇番］）

とあるのも同様である。

いっぽう、夕方の「野寺の鐘」についての印象的な表現としては、散文ではあるが、

（建礼門院が寂光院に向かう）道すがら四方の梢の色々なるを御覧じ過ぎさせ給ふ程に、山かげなればにや、日も既に暮れかかりぬ。野寺の鐘の入相の音すごく、わくる草葉の露しげみ、いとど御袖ぬれまさり、嵐はげしく木の葉みだりがはし。（『平家物語』灌頂巻・大原入②五〇七頁）

とあるのが指摘できよう。慈円の歌は、明け六つの鐘の音であったため、「思ひ入る」の歌の下の句「この暮ればかりかなしきはなし」とはずれが生じていた。それが、『平家物語』においては暮れ六つの鐘の音であり、より印象が近い。ちなみに、慈円にも、暮れ六つの「野寺の鐘」を詠んだ歌がある。

萩に鹿茅に鳴く虫心せよ　野寺の鐘の秋の夕暮れ（『夫木和歌抄』雑十四・一五二五一番・慈鎮和尚、『拾玉集』第三・三七四一番）

この歌は、『正治後度百首』（正治二年［一二〇〇］開催）において、「暮」の題で詠まれたもの（一〇六八番）であるが、同じ題で、飛鳥井雅経も、

おぼえずよ　野寺や近き　庵さすあたりも知らぬ入相の鐘（二七〇番）

と詠んでいる。

こうして見ると、「野寺の鐘」が歌ことばとして定着するいっぽう、「寺の鐘」という表現は、歌で用いるにはどこか落ち着きが悪いもののようである。「思ひ入りの寺の鐘がね」と読む説は、やはり斥けるほかあるまい。とはいえ、「思ひ入る／野寺の鐘がね／聞くからに」もまた、苦しい。どうにかして字余りを解消したいところだが、それには次の歌が参考になりそうだ。

初瀬山入相の鐘を聞くたびに　昔の遠くなるぞかなしき（『千載和歌集』雑中・一一五四番・藤原有家朝臣）

「のてらのかね〳〵」の畳字を「を」に改めるとすると、かなりの荒療治であるが、字母「遠」のなごりを「〳〵」

に窺うことはできようか。ともあれ、複数の「鐘」を「鐘ども」とする例（『かげろふ日記』中巻・二三五頁）は拾えても、「鐘がね」を見出すことはむずかしいようだし、複数の「鐘」の音をいうには、「鐘の声々」（『狭衣物語』巻三②六二頁、『弁内侍日記』一九〇頁）と表現すればよいので、ひとまずそのように処理して、「思ひ入る／野寺の鐘を／聞くからに」と読んでみたい。

さて、「入相の鐘」を詠んだ歌は枚挙に遑がないが、もっとも代表的なものは、

山寺の入相の鐘の声ごとに 今日も暮れぬと聞くぞかなしき（『拾遺和歌抄』雑下・五七七番・よみ人しらず。『拾遺和歌集』哀傷・一三二九番。『和漢朗詠集』巻下・山寺・五八五番）

であろう。有家の「初瀬山」の歌は、明らかにこの歌を踏まえたものである。そして、「思ひ入る」の歌もまた、この歌を意識しているとおぼしく、下の句「今日も暮れぬと聞くぞかなしき」の気分が、そのまま同じ下の句「この暮ればかりかなしきはなし」へと受け継がれている。

このように検討を重ねてくると、「思ひ入る」の歌は、「入相の鐘」の音に無常を観じる歌の系譜に立つものであることがわかる。ただし、「山寺」でなく「野寺」としたところに、いささかの新味があるようだが、「野寺の鐘」を明け六つの鐘とする慈円らの歌と較べると、伝統的な詠みぶりということになるのであろう。

なお、下の句「この暮ればかりかなしきはなし」について、「山寺の」の歌の下の句を受け継いだ表現だと述べたばかりなのだが、同時に、次の歌との類似も気になる。

人知れずもの思ふこともありしかど このことばかりかなしきはなし（『詞花和歌集』雑下・三九七番・待賢門院安芸。『新日本古典文学大系』の脚注には、安芸の歌は自作の盗用だとする藤原清輔の主張が紹介されている［三四五頁］）

詞書に、「子のおもひに侍りけるころ、人の弔ひて侍りければよめる」とあって、あれこれ物思いの種は尽きなかったが、わが子の喪に服すること以上に悲しいことはない、という。物語が閉じられた直後に、左大臣は侍従の内侍

から、実父の死を告げられたはずなので、親と子の立場を反転すれば、入相の鐘の音に無常を観じるとともに、実父だと教えられた人がすでに故人となっていたため、子として生前になにもできなかったという、取り返しようのない痛切な悲しみが重ねられている、とも考えられる。

以上から、「思ひ入のてらのかね〳〵／きくからに／このくれはかり／かなしきは／なし」と散らし書きされた和歌は、

思ひ入る 野寺の鐘を 聞くからに この暮ればかり かなしきはなし

と読むことにしたい。――深い思いをもって分け入った野中の寺、そこで撞き鳴らす入相の鐘の音を聞いたばかりに、今日の夕暮れ時は、かつて経験したことがないほどに、諸行無常が身に沁み、生者必滅の悲しみに昏れてしまうことだ。――このような意味に解することができるなら、やはり左大臣の心持を代弁したような歌だとはいえようが、これが、後人の補筆に見せかけた作者のしわざなのか、読者のだれかが感興を覚えて書き加えたものなのか、そのあたりのことは、やはり茫洋として確かなことはわからない。ただ、一首の詠み口は、物語成立時に近い和歌との共通点が多く、遙かに下って、例えば、近世の書写者によるものであるとは、やや考えにくいようには思う。

以上、巻三の冒頭から、物語の進行に沿うかたちで、本文校訂と読解とにかかわる問題点を取り上げ、順次検討を加えてきた。最初にもことわったとおり、網羅的なものとはなっていないが、この物語の本文を少しでも安心して読めるようにと、できるだけの提案をしてきたつもりではある。もちろん、本稿で解明できたことなど、解決すべき問題の、ほんの氷山の一角にすぎないだろう。それでも、物語全体にわたって読解を深めてゆくには、こうして、個々に試みた検討結果を持ち寄り、衆知を糾合するほか道はないと思うのだ。あとは、どれだけの参加が見込めるか、にかかっている。

『在明の別』については、近刊が予告されている新しい注釈書を手にする日が、なによりも鶴首される。だが、それを心待ちにするだけでよいのか。ここに、研究者としての覚悟が試されているようにも思う。（二〇一八年九月稿）

## 注

（1）『全対訳』に、「横川にいる前の僧都。左大臣の要請を最初は断った。」（三七二頁）と注するのは誤り。巻二、「四五物の怪に悩まされる中宮」の段に見える「やまのざす」（四〇一頁／50オ）と同一人物である。

（2）注1同様、『全対訳』に、「横川から馳せ参じてきた座主」（三八一頁）と訳すのは誤り。

（3）こうした読解上の罠に嵌った例として、付記Aの拙稿では「みごもる」の語を、Bの拙稿では「いとしい」の語を指摘したことがある。

（4）『全対訳』では、二つの歌の訳に、いずれも「子を思う心の闇」（四一一頁・四一三頁）という表現が使われているにもかかわらず、兼輔の歌は無視され、内大臣の歌について、『伊勢物語』第六十九段の「かきくらす心の闇にまどひにき夢うつつとは今宵さだめよ」の歌（一七三～一七四頁）が参考に掲げられるのみである。

（5）従来、『研究』『全対訳』『集成』とも「うち」と清音で読んでいて、『全対訳』では、「宮中に仕える上達部たちは」（二〇七頁）と訳しているが、金光桂子「『有明の別』と九条家」（同氏著『中世の王朝物語　享受と創造』「二〇一七年、臨川書店」所収）が指摘する（五〇～五一頁）ように、『紫式部日記』の記事に、「あたらしき宮の御よろこびに、氏の上達部ひきつれて拝したてまつりたまふ。」（一五九頁）とあるのと酷似しており、ここでも「氏」と解すべきである。

（6）女房の「身をすてゝこそは気色み侍らめ」ということばの理解にさいし、『研究』（三〇六頁）、『全対訳』（四五六頁）いずれも、

「山川の末に流るるとち殻も身を捨ててこそ浮かむ瀬もあれ」（空也上人絵詞伝　上）

と注で指摘し、『全対訳』では、「身を捨ててこそ浮かぶ瀬もあれ、ですね。ちょっと様子を見て参りましょう」（四五七頁）と訳している。しかし、この歌の淵源を特定することが困難なこともあり、引き歌と見るには慎重でありたい。むしろ、『源氏物語』「夕顔」巻に、「御気色のいみじきを見たてまつれば、身を捨てて行くに、」（①一七二頁）、『夜の寝覚』巻一に、「身を捨ててこそ思ひたばからめ。」（一一三頁）、『今とりかへばや』巻三に、「いかでか。身を捨ててよと

さぶらふとも」（三六八頁）などとあるように、主人に対して全力で支援、協力するさいの、常套的表現であることを押さえておくべきであろう。

（7）この箇所の読解に関しては、すでに注5金光論文において、「故右大将の面影を長年偲んできた人物としては、大殿が最もふさわしいであろう。」（七三頁）との適切な指摘がなされている。

（8）『全対訳』では、上記のように、「折からご懐妊中でもあり」と解しているが、中宮は、入道太政大臣が大堰に隠棲、出家する約一年前に、無事皇子を出産しており、現在再び懐妊中との記事もないので、従えない。

（9）「月の行方」を詠み込んだ歌の特徴や系譜については、金光桂子「『有明の別』の〈有明の別〉――題号の意味するところ――」（注5著書所収）に詳しい。

〔付記〕『在明の別』の読解上の問題については、次の拙稿をも参照されたい。

A「『在明の別』読解考――「この君はかりかにこもり給て」を中心に――」（「語文研究」122号、二〇一六年一二月）。

B「『在明の別』巻一本文校訂考」（「国語と国文学」95巻5号、二〇一八年五月）。